

いよいよ受験本格化

12月に入り、いよいよ3年生の受験が本格化してきました。3年生向けの案内は別に発行していますので、ここでは1・2年生も含めた全校向けの情報提供等を行っていきます。

共通テストの状況

12月10日(水)に共通テストの受験票がWEB上で発行されました。昨年度までは全員分の受験票を学校で受領し、配付する仕組みでしたが、今回から**受験票は自分でプリントアウトして会場に持っていく方式**に変わりました。出願時の転記ミス(手書きの願書をセンターで入力していた)がなくなったり、万が一の受験票の破損・紛失がなくなるので、かなり改善されましたが、学校で1枚ずつ受験票を配るといふ行事がなくなったのは少し寂しいです。

さて、今年度(2026年度)の共通テストについてです。大学入試センターの発表によると、志願者は約49万6千人でした。昨年度よりは千人ほど多いものの、3年連続で50万人を割り込んでいます。また、現役率は86%です。ほんのわずかなだけ浪人生の割合が昨年度より高いですが、あまり影響はないように思います。

前年度(2025年度)実施の大学入学共通テストは、全体として易しめで、**平均点が高め**になりました。新課程科目を含め、基礎的な理解があれば対応できる問題が多かったことが、その一因でした。**平均点が高かった翌年は難しくなる**と言われており、2026年度(以降)は、難易度が上がる可能性があると考えられます。

では、どのあたりが難しくなるでしょうか。かなり独断的ではありますが、予想してみましょう。

2026年度共通テストの予想と心構え

あちこちで情報を収集してみると、「**国語**」「**英語**」「**情報**」あたりの難度が上がらうと言われていています。これらの教科の難度を上げるとしたら、どういうことが考えられるでしょうか？出題者の立場に立って考えてみると、知識レベルでの難度を上げるより、題材によって難度を上げる方がやりやすいように感じます。

これらの教科では様々な題材を扱います。題材が日常的なものであれば、多少理解が不十分な部分があっても、文脈や状況から内容を補いながら読み進めることができます。しかし、受験生にとって馴染みの薄い題材の場合、内容を理解するために一段階多い思考が必要となり、その分、解答に時間がかかってしまいます。

「**国語**」では「**実用的な文章**」が出題されるようになりました(過去問は1回分しかありません)。実用的であることは必ずしも日常的であるとは限りません。**制度説明や資料の読み取り、複数の情報を整理する形式の文章**は、慣れていない受験生にとっては読みづらさを感じるでしょう。

「**情報**」(これも過去問は1回分しかありません)では、**プログラミングやデータ活用**に関する問題が出題されます。身近な具体例であれば手掛かりを得やすい一方で、**設定が複雑であったり、抽象的な内容**になると、理解そのものに時間を要する場面が増える可能性があります。これは、暗記だけでは対応しにくいという共通テストの特徴でもあります。

「**英語**」についても同様で、日常的な題材であれば、語彙や文法が十分でなくても内容を推測しやすいですが、**歴史的背景を伴う文章や、自然科学・国際関係などのテーマを扱う文章**では、背景理解が必要となり、理解のハードルが一段あがります。

このように考えると、2026年度以降の共通テストは、極端に難問が増えるというよりも、**題材や設定によって「解きにくさ」**を感じる受験生が増え、結果として難しく感じられる試験になる可能性があるでしょう。

これを踏まえた**現役の受験生へのアドバイス**としては、題材が馴染みのないものであっても、**基礎・基本の力が身につけば、落ち着いて対応することができます。**問題の雰囲気に関わらず、**冷静に情報を整理しながら取り組む**ことが大切です。

1・2年生のみなさんは、特定の分野に偏らず、さまざまな分野に関心を持ち、視野を広げておくことが重要です。理系であっても**国際関係や歴史・文化に触れたり、文系であっても自然科学や情報の基礎的な考え方を理解しておくことは、共通テストへの対応力を高めることにつながります。**

いろいろ書きましたが、あともう一つ。結局、大学入試は難易度にかかわらず、他の受験生より点数をとった人が合格します。自分にとって難しい問題はどの受験生にとっても難しい、それぐらいの心構えも大事ですね。

学部研究「観光学部」

先日の進路検討会の文系で少し話題に出してみたのですが、「観光学部」（大学によっては学科や専攻もあります）という選択肢があります。あまり知られていませんので、今回は簡単にまとめてみます。

「観光学部」というと、例えばホテルマンを養成したり、旅行会社の社員を目指したりというイメージがあるかもしれませんが、それだったら専門学校という道もあります。大学の「観光学部」とはどういうものなのでしょうか。

「観光」を大学の講座として最初に取り入れたのは、立教大学が最初だと言われています。本校では毎年ミニ大学で観光学部の東先生が講義をされているので、お話を聞いた人もいるでしょう。立教大学では戦後まもなく「ホテル講座」という授業がはじまりました。1960年代になってから社会学部「観光学科」が独立します。1990年代～2000年代にかけて、他の大学でも「観光」をうたった学科・学部ができるようになりました。立教大学の観光学科が「観光学部」となったのは1998年です。立教大学は「観光学部」の最古参として独自の地位を築いています。

一方、**国公立大学の観光学部**として筆頭に挙がるのが**和歌山大学観光学部**です。ここは、2007年に経済学部の中に「観光学科」が設置され、2008年に「観光学部」として独立しました。背景には独立行政法人化した**大学の独自性の打ち出し**や、国の「**観光立国**」という政策、和歌山県をはじめとした**地域からの要請**があったようです。

立教大学の観光学部と、和歌山大学の観光学部は、同じ観光学部ですが、**東京の私立大学／地方の国立大学**というだけでなく、やはりルーツといい、立ち位置といい、大きな違いがあるように思われます。

立教大学は「ホテル講座」からスタートしていることもあり、観光をビジネスとしてとらえるような学びが中心にあると言えます。また、プログラムのにもインターンシップなど実務的な内容に特徴があります。一方、和歌山大学は、観光を学問、あるいは政策としてとらえる視点に特徴があります。大学～大学院まで一貫した教育体制が整っており、日本で初めて**国連世界観光機関（UNWTO）の観光教育認証（TedQual）**を受けているということ売りしています。やはり観光業という視点よりは、公共政策としての観光という視点での学びに特徴があると言えるでしょう。

コロナの時期は観光業が低迷していたこともあり、観光学部の人気も下がり気味でしたが、現在は回復していると言えます。というのも、観光学部は公務員（まちづくり）や交通インフラ系、もちろんデータ分析やマーケティングなど、社会の土台にかかわる業種に強いということが知られているからです。話は変わりますが、1年生の職業講話の企画に協力してくれた磐田市役所の担当の方の部署は「**経済観光課**」でした。公務員志望の人にとっても、「観光」は一つの切り口になるかもしれません。

十分な紹介はできませんでしたが、「観光」を学ぶということが、単に温泉行ったり、名所巡ったりすることを学ぶものではない、ということも少しでもわかってもらえればうれしいです。

学部研究：医学・歯学・薬学・看護以外の医療系

よくある進路の相談で、医師は難しそうだけど、医療にかかわる仕事に就きたいというものがあります。もちろん、自分で探して選ぶのが大原則ですが、どういうイメージをすればいいか、簡単にまとめてみました。

医療技術にかかわる仕事（基本的にバリバリ理系）

臨床検査技師	血液や尿などの検査。目の前に患者さんがいるわけではない。 医師とデータのやりとり。研究職もありうる	名古屋大・都立大・大阪公立・名古屋市立など
診療放射線技師	目の前に患者さんがいる。手術室は少ない。 医師とデータのやりとり。AIによる画像解析などさらに発展中	名古屋市立など
臨床工学技士（ME）	人工呼吸器・人工心肺・透析装置の操作。目の前に患者さんがいる。 手術室で医師と協力。メーカー就職もありうる	金沢大・大阪公立・神奈川保福大など

患者さんと接する仕事（文系からでも可（試験科目による）・専門学校も選択肢となる）

理学療法士（PT）	歩く・立つなど、身体の基本動作を回復させる	筑波大・広島大・都立大など
作業療法士（OT）	食べる・着替えるなど、日常生活ができるようにする	金沢はPT・OT
言語聴覚士（ST）	話す・聞く・飲み込むなど、コミュニケーションを支える	
視能訓練士（ORT）	視力・視野・両眼視（弱視・斜視）のサポート	私立大学のみ

あまりにも簡単すぎるのと、他にも紹介したい医療系の学部・学科・仕事があるので、次回に続きを書きます。